



信濃漫錄

全

15
1521



門 45
號 1521
卷



信濃湯筆首
今學者從事著作之場餘業必及隨
筆隨筆不能掩其學之淺深者也其辨
物也不擇古今雜載雅俗其惠人也鼓
舞初學起予老成但其精而小往有
之博而不駁雜難得其人是豈學之不
勤哉抑年之不長也五十槐園先生以
英邁之資考萬葉集解書紀歌一往破
的精義釋紛在賀茂翁固為忠臣在奉
居老人亦稱難兄自荷田氏之學興先

生蓋鏘：焉嘗病於信濃，寄舍中夜興，
歎曰：可惜！上古辭微，吾誰能解？天地諒
此心，使身保數歲，壯哉！先生之志，古所
謂死而後已。先生有之，其子久守子，出
示此湯筆，且泣曰：械：遊園樹，僅拾數
葉，落唯顛，有人見，或以為有，色余聞之，
愴然曰：是先生病間答人問者乎？頗似
萬葉別記。昔人有癩，預盛德，性理錯，猶
著書者。先生雖病，亦復勉焉。攷：下筆，
不佻，可謂壯矣。惜夫！寸高而壽短，業不

酬其志。設使先生得及六七十，若八九
十，其所辯惠無寧唯是。雖然，有其子在，
焉必復繼之，以汎瀾瓌富之業。先生死，
而不已。
文政紀元至日 尾張秦 鼎撰

尾頭備書



の一本は五可斯何本とありて斯ハ期のまればの謬言也志の
也ハ舊訓のまのつうあとおもとくも

莫囂圓隣之大相土无霤氣吾瀨子我射立為義五可

期何本

かゆも登香山望國の奇のあるをもておとよに是も中天兄
命のかる山に登りて必ん志満るに事をおもわや甲國兄の
さやたふをねもく後をあらひおとよして紀の行幸の追及
まはりのおらま多しおたいつつハあくむと夫君を急おねひ
まひてよもせは奇も

○多鷄蕪香

或人問とく後君の陸奥石濱みて堀出せる田道が碑とよ

久守ま吉事記の
倭建命の吾足
不得歩成當藝
斯形とらふなき
とり名もこの
がけとむふ
うま

入道母よきけりうとりふまのあるを人くよんせしふきけそ
うハも海さうと回言とて回後まもいひ室も志ういひを
そのまの愛るるをなまもくつふうしねもハもハ心後あ
りまもよみけたるハあやとふよハ己答るハ後あり
あもくそけそわといふ言ハあもあ六のまくり玉敷
而待益欲利者多氣蕪香仁來有今夜四樂所念といふ
ありて他よんえたる事ハ此哥た海さうといふをよてハ
せびりといふも海たけ海言ふもあづばを初めいさう
りとして一首の奇のまを釋たすして海さうあけり月後
そといハあハみこまといつてハ海さうハ既ハ第ホ三の
葉の解概の落葉のまはよいあけるぬくもまハ年月日

後世漫録

四

といふ事ありきや
 九卷 瓊合を身よ
 一のいひつこの
 津のいふはかひ
 とも男の由らぬ
 ひらゝ又海を捕
 かりし事とて同
 うとて一文天
 三つちも同し
 一

知る一みやづの宮就子やつたハ賤就子なるも一既日本紀
 奇解よひおほしもあまのり又何津産ありつたハ之は
 ちく宮まのひハ非也津之とつたハ之も古傳ありあま
 びて之はあまのりはあまのりも何就とつたハ之も古傳ありあま
 也その就とつたハ之の古傳も多しハ家就廬村三諸就あづくみづ
 く唐づく鴨づくたといふつくあて非く流りやあて慥は附着
 ともこのゆもあまの古言をよく考てあまのり也

○三諸就 鹿脊山

ちよつた海中ハ三諸著ハ等紫卷六
 云云七丁ハ三諸就三輪山見者云云とありて鹿脊山三輪山
 といふゆもつたハ河也とて師説ハ天降就の傳つて府詳考

中も何の部ハねもたたり或人ハ生緒懸の流字といふと其の著
 紫卷の徒の得うてなるハ流く考むはれともせびんよまうせて
 流字といふてみるにハ又字を改むともハ古くを考むるにハ
 といふもつたハ流字といふも今ハ流字といふも流字といふも
 ねもつたハ流字といふも今ハ流字といふも流字といふも
 本字と探して照合せて考集申或古書古文ハ慥ハ流字
 ひあつたハ流字を改むともハ流字といふも今ハ流字といふも
 又字を改むともハ流字といふも今ハ流字といふも流字といふも
 其一のゆたかりなるも三諸就ハ流字といふも三諸ハ糟
 の酒の名區志考の中ハ流字といふも三ハ酒の美と云諸ハ
 と流字といふも流字といふも流字といふも流字といふも

流字誤録

八

すしに現をこしつゝこの古きなり

○如是詩

あのをまき葉を中よりの多きと押して考極は冬三は如是谷
蒙吾者祈奈年君尔不相可聞といふ哥は強せり如くもて
の験もる此事をあれやうにきこつてこのまき也古今葉は
形はといひもぬきかへつゝいふまて此やうなあり
いふまてやうもは目一丸葉葉もえたる如此故は如是谷蒙
如此而如是耳之かといふは皆まのまきとてん得ん也
○いづく
去年の郷は海にこそとて或人云

けしむればれつての地をあくうれていふせやうあまは
夕顔の葉

是は若れは哥あやとり中志うり右の哥は地の中夕顔の生
てあせやのうへは遠まはたを程新のふまてむろあまあま
いふまはたの強は哥うけてもて人のいふまて書有たはれ
まがえ皆うここといひくまは或人云あまの哥はあくうれといふ
まは古哥はまて月はあくうれ花はあくうれあといひて彼は
あくうれあまあまてまはまていふまてわらわをまてあ
くうれあまあまてあくうれあまの例あまてまてあま
あまの事まの心はよさまてわやうよませといふまてあま
あまのまてあまの心を受ふは即おれれうまの師あまはくうれ

ろあわひぬるよを昔多し海といひの借よかりん。あ人のこころ
えあしやひふに後れおれたの哥よ
梅うきおれたのう垣根をあこつれて中々のあふりよむ
酒ととむるまことしに哥あはもむらうあやといひに己云
あうり後れおれたの哥ハ千載集に載らるるも後れおれたの
給うまこと後成マそのむらうを編みけし千載集に探せり
へよああし右の秘若い人ならあもまことえたは情實卓識と
おむれはりの学の師といふむ。何の秘うあしむといひこれハ
或人も美人もことごとくぬその存まこと彼或人來りて云秘若に
後れおれたの哥をいひしよ海ありとむらうよふ半ありといひ
あしとむらうあはるるに海いひよあこつれといひまことよめる哥も

又詞をもあまの書出して是が中ふあこつれよあかしてし
あはしとむらうあはるるに海いひしよ海ありとむらうよふ半ありといひ
て例多しを捨くふよあはるるに海いひしよ海ありとむらうよふ半ありといひ
しその書出た。中ふあはるるに海いひしよ海ありとむらうよふ半ありといひ
これ出。門出るりや。又もこれおそくも海のわしよあはるるに海いひしよ海あり
よあこつれよあはるるに海いひしよ海ありとむらうよふ半ありといひ
ひて世の塵と出度とあはるるに海いひしよ海ありとむらうよふ半ありといひ
しよあはるるに海いひしよ海ありとむらうよふ半ありといひ
うらうらと目とこはきれもあはるるに海いひしよ海ありとむらうよふ半ありといひ
あしとむらうあはるるに海いひしよ海ありとむらうよふ半ありといひ

以前廢たるありしとして文曆仁治の頃ハ大内裏廢絶るを
建禮門の治なる事疑ふはともや又臨時大祓小も差あり
て除服諒闇終大嘗前八月晦十月晦十一月晦伊勢齋王卜
定同群行等ハ朱雀門より行はせ其餘ハ建禮門より行はせ也
委ハ文徳紀北山抄等より見ゆ二季の大祓も應仁乱以前よ
でハ行はせしはゆへに薩戒記曰應永世年六月廿九日丁酉六
月祓如常大祓參向人々可尋註同世三年十二月廿日己未大
祓被付所司歟可尋又康富記文安四年六月條ハ大祓被行事見
えり其頃ハ朱雀門の治より行はせしはゆへに大内裏ハ承久
以来廢たれりなり

建禮門の治なる事疑ふはともや又臨時大祓小も差あり

○海川小越との小例

或人云近ある意書の玉ありと云ふ書は後人をもとより
たてして規鑑とせし彼海悉くよるに記ありと云ふ書は
あつむ意書ハせよと云ふれを後傑るれハ是れ也の人の
か記眠を記する海にて企及よるに事あると云ふ書は
いふに彼書中ハ山はあつむといふ河ハわらうといふは定
めて海川ハ越といふ事ハありとありと云ふ書ハ十二
延故要等保佐佐乃麻且於久利家流伎美我許々呂波和須良
由麻之月と云ふ書ハ越といふ事ハありと云ふ書ハ十二
奥白波雖不知妹所云七日越來是ハ海ハ越といふ小例あり

たる後の物徳ありてても細くは平言音便多けれど、
 便なく濁音るに流もあつた。あは後の言まで書か
 したる。はさるるに流よく考て、書かへりて、
 八雅言を撰じしに、あは、音便ハ上古も今も
 濁音の音便の訛音や、正音な、ハ後の言も、
 濁音の音便あるは、あは、ちや、
 つた、濁音も、あは、ちや、
 や、
 雅も、
 奇を、
 好も、

久守之清濁の
 多ハ古言法濁考
 も父の濁も、
 ち、
 考、

一と、
 とも、
 子ハ、
 たる、
 ち、
 便、
 うい、
 たる、
 強、
 音、
 あり、

後、

致してそそりて百小竹之三野乃王金厩立而飼駒角厩
 立而飼駒略何然大分青馬之鳴立鶴とありて及影衣袖
 大分青馬之嘶聲ヒラヒラとありたりその金厩角厩とありて
 立而飼駒とありて其の音をわきまきしむるは其の音は
 字の如くは志の如くは大方の二字も泰の一字を添えしむるは此の泰
 ハ亦雅の西風を泰風とありてと見えしむるは泰ハ亦の音は小飯た
 字の如くは志の如くは大方の二字も泰の一字を添えしむるは此の泰
 や亦の音は志の如くは大方の二字も泰の一字を添えしむるは此の泰
 此の如くは志の如くは大方の二字も泰の一字を添えしむるは此の泰
 此の如くは志の如くは大方の二字も泰の一字を添えしむるは此の泰

○ 俳風の いき

考は風ハ俳の長息るれハ俳風のいさといふことありといふことあり
 つもたる短也といふことありといふことありといふことありといふことあり
 ありて俳風の風といふことありといふことありといふことありといふことあり
 とせ 此の如くは志の如くは大方の二字も泰の一字を添えしむるは此の泰
 おもひたるハ俳風の長息るれハ俳風のいさといふことありといふことあり
 やありて門人長谷川普徳といふことありといふことありといふことあり
 いひては人ありといふことありといふことありといふことありといふことあり
 松門人畠田村小泉好平といひたるハ彼里人飯茶を著し編と
 ありて其の音は志の如くは大方の二字も泰の一字を添えしむるは此の泰
 方々の今も是の如くは大方の二字も泰の一字を添えしむるは此の泰
 ることあり伊勢の國号も飯稻といふことありといふことありといふことあり

母理國志多備之國ともつゞきたるは愛をあらわしむるあり
 て素行を考つるに卷三評吾大王者隱久乃始瀨乃山爾
 神左備爾伊都伎坐等同七十四隱口乃泊瀨越女我手尔纏
 在王者亂而有不言八方同同河風寒長谷乎歎乍公之阿
 流久尔似人母逢耶同同隱口能泊瀨之山之山乃際爾
 伊佐夜歷雲者妹鴨有牟米七一同隱口乃泊瀨山尔霞立
 棚引雲者妹尔鴨在牟同同狂言香逆言哉隱口乃泊瀨山
 尔廬為云同同隱口乃泊瀨之山丹照月者盈是為焉人之
 常無右等の分とつゞき考まハ泊瀨ハ上古の葬所にて山城
 の都の有部山の類と云々もたなり又卷十六は事之有者
 小泊瀨山乃石城尔母隱者共尔莫思吾背とある石城ハ卷五

久事三...
 ハ古事記...
 こころの...
 やまの...
 たけ...
 ぬ...
 り...

石城ハあるとハ死して葬埋せしめを云也此歌の
 ことを上の母とも引合て考まハ隱口ハ隱城の跡地なる一終
 終よさて泊瀨ハあるハ終よと云ふはつゞきて別墓之俗を云ふ
 うゆくえりともぬ又分詞といつてをえうたもつゞき終處の色
 たるぬともぬ一又倭姫命 世記の志にひまつゞきたるハ
 下部の色ハ備後下下部ハ高野五の巻の古日記を云ふハ之多般
 の使放比豆と云ふを云ふて地下ノ黄泉水を云ふつゞきあはし
 ためて後古事記ヲ物自子の後母ハあはれことゆてたるともあも
 ふよともい葬地を云ふつゞきおやと云ふなり終處ハハ葬地ハ
 四葉解の分記ハハハ

と宣ふ志一ハ即日の傳ふと成るとれそ一

○みまじふ まじく

是ハ區志考ニ挙たり大傳饌ニ傳ふ区志といふことより
之ハ區志ハ酒の古名久志の約め兼ふじうハ傳ふるといふ
こととて手向のじもふ同

○箸じふ たせ

箸傳ふる形といふ一云はつり形ハ魚ノまね業ニまね合ふとれといふ
嘗より出づるも業業三卷解のふ記名なるの條よりいふとる

○なほよみののの圖

○うちよせ よせ

○ゆく ゆく

○あくく く

右の四條ハ區志考ニ出して委しくせむれおやうれど業業考
概の落葉よとていふことハめつとるもるれハ省なり

○見常衣

州人小糸好平が問々ハ業業卷十一ニ希將見君乎見常衣左
手之執弓方之肩根搔禮去の尋曾ハ留めて法ハ例と承りつる
礼とち見たるハいふこととて右ハ宣ふ祠の玉の珠も
まにき波違へる哥れ中ニ出せる宣ふ 皇朝学の達人といふ
とも業業よおきてハいふこととて是ハ才ニ句を見常衣とよ
むへ下とていふハ體語より受ける例るをを見ハみとていふ
ふハ常ハ登古の詞を假して是をハ礼とちいふ格る也ハ右

の哥多波遠へるふあはる今本の初の新きるを等閑よりと
あそりしはるるあそり

○阿由志太

豊後國佐伯のまき世傳三満のこりめとんをしとよそり齒の抜
たるをそり先生お齒をあえすしたなとくしおれおれおれ
をあそりといはるるさそりやとさひしとぞ三満のひらへ
西國ふて菓の類の梢よちるを落し歯をあやそりといひおれ
けしと落るをあえるといふとてそり落あやそりといひ
いへし是古き今血をあやそりといふとあやそりといふ
十八は橋の哥阿由流實ハ多麻よぬよつともは落てんそり
あういよとあはるるは落たるまはぶ貴きと落てん又巻八は安

要奴のには花笑はるるあるはあはるるは花笑たる又巻
十は水草の花の阿要奴蟹まはも上は源氏よあえく小
んえりやとあはるるのあはるるやうに又あはるるといふこと
りり方とあはるる古言のあはるるそ多よゆさには二男正睦の病
時秘波は連ねて門人土佐の國人小松親枝の療治をうそり
でその茶の虫食よあはるる花茶麻あはるるといふとあはるる
だといはるるさそりといはるる土佐の國ふてはあはるる
あはるるといはるるさそりといはるるはあはるるかたてはあはるる
いふと雅言よゆららららといふともあはるるの約言る
へあはるるといふもあはるるそのあはるるをいはるるあはるる
もいふとあはるるあはるるのあはるる例ハあはるるあはるるの例あ

村の肉よりあまのこし

○山とりのと長のかつ紙

葛城巻十四、夜麻抄里乃乎呂能波都乎尔可賀美可家
カ奈布倍美許曾奈尔與曾利雞米

此哥回説は魏時南方獻山雉鑑形而舞といふとあまのこし
ちりをもあまのこしといひたりといふと最末尾也といふとも末尾
いふて説とくくづよとて回説はあまのこしとての強説は久老考
あまの十四の巻は回説の如く岡本の宮の末藤原の宮の初めあ
まの哥とていふては説集甲よりあまのこしといふてはあまのこし
あまのこしといふては説集甲よりあまのこしといふてはあまのこし
あまのこしといふては説集甲よりあまのこしといふてはあまのこし

ら教師ハその頃京師人の東より下りてくるがよめるも
回説となすけしきハ異なる考もあまのこしといふてはあまのこし
畧解といふては或人の説として山鳥の尾呂の説は山鳥の
尾の光あるといひて下のカ奈希倍美ハとてこの説はあま
山鳥の尾の末の光とて人あまのこしといふてはあまのこし
いふてはあまのこしといふてはあまのこしといふてはあまのこし
うけとていふてはあまのこしといふてはあまのこしといふてはあまのこし
初めれ二むハその門といひてはあまのこしといふてはあまのこし
て墓をいふてはあまのこしといふてはあまのこしといふてはあまのこし
えりといふてはあまのこしといふてはあまのこしといふてはあまのこし
終處ハその終をいふてはあまのこしといふてはあまのこしといふてはあまのこし

あて右の哥其をいへりけえたりある國内かゝり上回を
いへりハ働くやうの事と申すけりといへりハ古きことなり

○ 烝被 亦胡也我下

こまを著書系今をいへりつぶと海とよしたるハ火氣上行也と
字注のわきハ熱さきとてありよとつるあるへく也どこハ古
事記ハ阿夜伽岐能布波夜賀斯多尔牟斯夫須麻尔胡夜賀志多
尔多久夫須麻佐夜俱賀斯多尔とわきハ烝ハ牟斯と訓べき
決まりさてこのまを考るにまづ古事記の今の阿夜伽岐
ハ綾垣アヤガキハて幔帳壁代の類をいふるへ緋垣といふ稱牟斯夫
須麻ハ被ヒ被ヒ下シに引敷被也被ハ身代ハ代ハ多久夫須麻ハ上
ハ龍オビキ着キ衾シをいへりかひありきりハ古事記の今の注

小も又美紫十四多夫須麻志良夜麻可是能宿奈敵行母古呂
賀於曾伎能安呂許曾要志母とハいへるを併せハて
榜衾新羅とわける發語を榜の白きつくくまといへりハいをれハどとわくハ
榜の極或ハ榜布といひてする是なるを衾といへりハたを白きにわける
のこの發語ハねとわくハねハたをさきをいふものにあひハこの新羅
符らせたるも如と着のまわり又卷十四なりも子孫の總統といふまき
衾を掲げし後志母といふハのくおひて後立といへりてこのあつふ
と海と別るとれもふ是も古の跡あるものふして上つ衾
なりへ上を阿とゆる即言筵衾ハ對ハるの名小こそ者ハ色さ
て今々に次のものを奈胡也我下丹とありハ誤あり系中柔の字
を亦岐亦胡とよして奈胡とよむゆいともあるよふ漢ニ柔虜
亦ハ胡波也
なりハまろりまゝして古事記ハ亦胡也とわきハ奈ハ亦をまむ
めたるものあるをおもひあはらめてよ下ハ東の義なりハ

久身云々之集
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引

史十六竹取翁下階を重敷とあると亦之として心持云々二天雲
 之五百重之下丹とあるも裏なるを規へ一於この云ハ竹取翁
 の字の解小いへるをも又云へ

○みわき云々

村田云々海とひらくみわき云々と云ふは順勢の云ふも
 後成マの字小もあててと云ふよりうらうらうと云ふも
 小分ぬるはれは云々云々の久光云々云々云々云々云々云々
 びへさう禮の字をレの儀字とのをせの人をゆきとレの儀字
 小用いたる例美雲集申に云々云々云々云々云々云々云々云々
 レの儀字ハもとよりみて又呉音ライる色ハラの儀字ハも用
 云々云々云々のハあら禮松系つゝ禮石さう禮石さう禮石の類の

久身云々之集
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引
 阿礼云々引

禮ハみるラとよむべしその別の儀流美雲四の冬お記小悉
 く挙おけとさるを禮をレトよとありしより禮と別の別の混
 一ありあまゝありて和名抄にも混したるありたりさて延喜
 式加茂系の條小下社上社松尾社別阿礼料文色帛各六疋二下社
 此社盛阿禮料管八合下社三合上社五合云々明檀四合官物又
 一園韓神三座祭條荒管八合又二鎮魂祭條鹿管一合又三御襖
 條鹿御服二貝料布二段五色薄絶云々右に所引の鹿管鹿御服
 又三代實録宣命に加茂齋院を奉らる事阿礼為等咩止奉
 給といふあり是ふを合せ思ふ小あらハ明白清淨の云ふて
 明の略語之志うらハ是ハ伊勢ふて明衣といふおあて朝廷お
 て、齋院といひ加茂おてハみあらといふる云々一齋院を

之等云々和物法に
 備ふともなうやしら
 又くいふにうそ
 記さる人のねま
 ありふまを今
 幸ふに云々この
 ぐあふことある
 るとねま抜麻
 の略法をく

あれをとめといふをもてあらハ齋のさるるを初り齋服を伊
 勢ふて明衣と云ふてあらハ明白アハラの略法を初りさてお
 の祭ハ神祇令云一月齋為大祀三日齋為中祀一日齋為小祀と
 ありて加茂系ハ牛祀ふて午未申の三日也その初の午日みあら也
 志うらハその日明衣を下上社松尾社ふなり神人氏人まで齋
 服を着る色ハこ色を配するをいふれむくとはいふるべし
 むくとハ今の世盃をむくたと云むく也京作にてハ今も御家
 の官法をいふめ下この衣法も其の祭の日よりなれぬふう
 ハ是りぬたるべし若ふむける鹿筥のあらハ明櫃アハの明衣明
 白アハ浄のさやまて明櫃アハの明衣アハ韓櫃アハといふうらと同義なり
 うらとあらといふうらとさる浄ハ古事記ふ蛇の韓アハ鋤アハといふ

を日本紀ハ蛇アハの荒正アハとありとと何うらまるといふさる
 を古事記ハアトトとを省さ日本紀ハカトトと省くると
 の之あらハハと明白浄のさるるを一物してようらとさる
 のといふホフ襦アハとさるうらとあらといふさるさるうらあ
 おからもなといふ類のうらハ彼土より流るま。物といふ
 うらうらむから衣うらアハ櫛アハなどの類のあらハあうらの略法明
 白のやめ類のあらアハ櫛アハをあらうらの類のあらハあらうらの
 うらとせアハ櫛アハ發アハのあらうらとせ

名古卷のさしにあしき
よみぬこゝろをいそぐるに
父のいさひのこゝろいし信濃漫
録柳の落葉と友られと
ふりて板ふるこゝろをいそぐ

斗類

らりれこふ柳の落葉と
つさつ免つ

色ありけり
いん人も

文政元年十月 荒本因之守

荒木田久老大人著述

信濃漫錄拾遺

近刻

五十槻園藏板

文政四年 辛巳五月刻成

名古屋傳馬町二丁目

美濃屋清七

製本書肆

